目次內容

A. Einleitung
B. Die Erzählung von Śunaḥśepas Erlösung vom Opfertode
C. Śunaḥśepas Opferung und die Königsweihe
D. Das abgekürzte Śʼnaopfer.
E. Die Geschichte von Śunaḥśepas Adoption und die Angelegenheit seines Erbes.
F. Der Schlussabsatz der Gesamtlegende.
G. Prosa und Vers.
1. Die Verfasserfrage.
2. Das zeitliche Verhältnis von Vers und Prosa.
H. Zusammenfassung der Ergebnisse der Untersuchung

(Besp. von Sasaki)

Helmuth von Glasenapp: Der Pfad zur Erleuchtung. Eugen Diederichs Verlag, Düsseldorf-Köln 1956. 220 s., DM. 9,60

元來、ヨーロッパに於ける佛教研究はテキストの譯出に向けられるか或はテキストから自由な哲學的追及に向けられるかのいづれかであつた。最近の方向はテキストを中心とし而もそれを問題的に取上げてそれに哲學的體系を與へようとする方向をとつてゐる。

こうした操作は最も思辨的にして且つ文獻學的精密さを兼備したドイツ人學者のみよくなし能ふところの方法論である。

此のヨーロッパの新しい方向を代表するものはドイツから出た Frauwallner, Die philosophie des Buddhismus, Berlin 1956 と Glasenapp の上記の著作との二つである。

佛陀の眞の本質といふものは小乘佛教を背景となしつつ大乘經典ではドケティッシュに或はテオモルフに論及せられた。さういつた佛陀の本質に關する思想的展開特にヒラルユッシュなテレオロギーはキリスト教と多くの類似點を持つものとしてヨーロッパの注意を引くのが常である。

グラーゼナップ博士は一定の教義卽ち四聖諦、十二因緣といふ普通あげられるディスポヂティオーンのみにたよらないで問題的に古代の世界觀を批判しつつ叙述する。然も單なる叙述でなくテキストを中心となしそれにフートノートを附加し更に著者自身の註解を挿入せしめ佛教思想の哲學的位置付けを彫出しようとしてゐる。

普通、佛教を研究するにあたり、それを印度的諸宗教といふ廣汎な領域に於てとりあつかひそれとの聯關を問題にするのであるが—然も此の方面の研究さへ日本には多くない—さうした仕方が今や反省せられるに至つた。佛教を印度諸宗教の廣い領域內でとりあつかふといふ仕方は必ずしも佛教哲學に對する深い理解を必要とするものではなく、それなくしてもなし能ふであらう。然るに歷史的規定をはなれて生きた佛陀の精神を再生せしめるといふ觀點から取扱ふがこゝで試みられた。然もテキストを中心にした文獻的研究を基礎としてゐるといふ點に博士の從來の驚くべき諸著作と一線を畫した新しさがある。

外國文化に親しむものは誰でも先づな

さねばならないことはよく解明された原典を机上におくことである。さうすることによつて初めて生きた佛教も亦、正當さを以て生きかへつてくるのである。

専門家並に佛教と哲學とに關心を持つものにはそのことに於てグラーゼナップの本書に感謝しなければならない。

(Bespr. von Sasaki)

G. Tucci: Minor Buddhist Texts. part I. Roma 1s. M. E. O. 1956.

テウッチ教授がチベット並びにネパールで發見した梵文テキストは主として佛教に關するものであつた。

こゝに出版されたものは其の一部である。先づ無著の Triśatikāyāḥ Prajñāpāramitāyāḥ Kārikāsaptaiḥ の梵文テキスト並びに漢藏譯、更に英譯を附加してゐる Vajracchedikā の分析、同テキストの Gilgit Text があげられる。此に次で龍樹の Mahāyāna-Viṁśikā カンバラパーダの Navaślokī アムリターカーラの Catuṣṭavasamāsārtha ジターリの Hetuttotvapadeśa とヴイデイヤーカラシャーンテイの Tarkasopāda とその研究がふくまれてゐる。

右の中、特に學界の嘱目してゐたところの Navaślokī 及び金剛般若經論頌梵文の發見は歴史的、思想史的無著の位置付けに一つの新しい客觀的根據を與へるものとなつた。

金剛般若經論頌の梵文について一言すれば元來般若經の諸註釋の中、こゝに出版されたものがその重要な註釋の中の一つである。それが大乘佛教で重要な位置を占めてゐる無著によつて述作されたそのものであるといふことに本テキストの重要性がある。此のテキストは藏漢との比較なしには理解出來難いものであるがテウッチ教授は其れにあたる漢譯として能斷金剛波羅蜜多經論をあげ、又、タンジュールにふくまれた無著に歸せられた著作にはふくまれてゐないが藏譯の Vajracchedikāyāḥ Prajñāpāramitāyāḥ Vyākhyānopanibandhana-Kārikā を以て此れの藏譯としてゐる。此の藏譯はブトンのタンジュール目錄にはふくまれてゐないがブトン以後にタンジュールに附加されたものであつたらうと教授は考へてゐる。

こうしたオリジナル・テキストの發見出版はテウッチ教授のそれにつゞくであらうところの Vimuktisena の Abhisamayālaṁkāravyākhyā の出版と共に中觀瑜伽思想史研究の上に一つのエポクを畫するものとなるであらう。

(Bespr. von Sasaki)

教行信證證卷講讀

宮本正尊 述

この書は、昭和三十二年度の安居本講をつとめられるについての講本として著作されたものである。特に「證卷」を講義の對象として選ばれたことについて、著者自らその意趣を、從來の宗學に於ては『信證の關係』についての考究が充分でなかつたこと、證から開かれる「眞佛土論」に留意すべきものがあると思われること、證の内容である涅槃は佛教を基礎づけるものである、「證卷」に示された涅槃のすがたを明らかにすることは、眞宗を佛教學的に基礎づけることになる、とのべている。廣い佛教學の視野に立つ